

あとがき

日本株の見通しは、デフレ脱却の筋道が見えないかぎり、当面の間、楽観は禁物です。

たしかに、東京市場では、外国人買いが目立っています。青い眼の外国人投資家たちは、今年3月の第1週だけで、1兆円以上買い越しました。私の予想では、2011年の前半だけで、外国人が数兆円以上買うのではないでしょう。

外国人が日本株を大きく買い越すとき、日本の株価はふつう大きく値上がりします。ところが、金融機関などが持ち合い解消で保有株を売っているせいか、東京の株価は上値の重い展開が続いています。それでも、青い眼の投資家たちが買いを継続しているのは、日本株が底値圏にあると見ているからでしょう。彼らもまた、下がったら買うという逆張り投資を続けているわけです。

彼らと話をしていると、「日本復活近し」という希望が湧いてきます。

東日本大震災発生の日、帰宅難民となった東京のサラリーマンはターミナル駅で夜を明かしました。いつ電気が点るかもわからない、寒い夜でした。タクシーを拾おうにも、クルマ待ちの人が長蛇の列をなしています。運良く乗れたとしても、大渋滞の中、クルマはほとんど動いていません。

駅構内に集まった人々は、仕方なく階段に腰をかけ、じつと朝が来るのを待ちました。騒ぎを起こす人は誰もいないし、朝、電車が動き始めると、自分の周辺のゴミまで片づけて帰宅の途についたのです。

青い眼の投資家たちは、そうした老若男女の日本人の姿を知って、みなひどく驚きました。自分たちの国であれば大騒ぎが起きて当たり前だし、怒りにかまけてショーウィンドウを壊したり、店の品物を略奪したりするのがふつうだということです。それに引き換え、日本人はひどい目に遭いながら、それにじつと耐え、ゴミまで片づけるとは……たいしたものだ、というわけです。

また、彼らはこんな話も紹介してくれました。

アメリカ軍の救援隊が東北の被災地に入ったとき、東北の被災者は、アメリカの救援隊の人々に「ああしろ」「こうしろ」と一言もいわなかったら

いのです。アメリカ国内の救助活動なら、たいていは救った相手から何か文句をいわれるといえます。たとえば、「そんな持ち方じゃ、痛いじゃないか」とか「もっと、丁寧に扱え」と。

ところが、東北の被災者たちは、救援に来てくれたアメリカ人に何も要求しませんでした。感謝こそすれ、後はじっと歯を食いしばって黙っている人ばかりです。そして、救援隊が帰る日には、自分が食べるものさえろくにないのに、「これ、どうぞ」とおにぎりを差し出したというのです。

「こんな国民がどこの国にいるだろうか」と、アメリカの友人はびっくりしました。

日本人とすれば当たり前のことかもしれませんが、その当たり前のことが世界ではきわめて珍しいことなのです。

日本人の忍耐力、我慢強さ、礼儀正しき、そして他人を思いやる心は健在です。青い眼の外国人は日本人のそうした底力に驚き、日本人そのものを再評価する機運が生まれています。

外国人投資家が「ここぞとばかりに日本株の買い越しを続けているのも、「日本人はきつと立ち直る」と、彼らが実感しているからでしょう。

夜明けは間もなくやってきます。

いずれ近い将来、日本の政治も変わり、中央集権の官僚支配も終わるでしょう。そして、東日本大震災の本格的な復興もはじまります。

そのときまで、日本人は我慢強く、規律正しく日本再生の日を待つでしょう。政界に有能なリーダーが現れる、その日まで。

菅下清廣